**様式 C-19**

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23 年 5 月 26 日現在

**機関番号：34509**
**研究種目：若手研究（B）**
**研究期間：2009～2010**
**課題番号：21730502**
**研究課題名（和文）　葛藤場面における感情コミュニケーション過程の解明**

**研究課題名（英文）　The study of emotional communication in a conflict situation**

**研究代表者**
**山本　恭子（YAMAMOTO KYOKO）**
**神戸学院大学・人文学部・講師**
**研究者番号：50469079**

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は，社会的スキルが要求される感情表出の葛藤場面を設定し，他者との関係性が感情コミュニケーション過程に及ぼす影響を検討することである。その結果，面識のない観察者の存在は，未知関係のコミュニケーションを促進する効果を持つ一方，友人関係の感情表出には影響を与えないことが明らかとなった。友人関係のペアにおいても，観察者が面識のある人物の場合には，観察者による促進効果が認められた。二者間コミュニケーション場面において，外部観察者は表出行動を促進することが考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study examined the effect of personal relationships on emotional communication in an emotional conflict situation. The results showed that the presence of an unknown observer facilitated communication between strangers, whereas the presence of an unknown observer did not affect emotional expression between friends. In the presence of known observer, expressive behavior between friends was facilitated compared to alone participants. It suggests that an observer facilitate expressive behaviors during dyadic communications.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2009 年度 | 2,300,000 | 690,000 | 2,990,000 |
| 2010 年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 3,100,000 | 930,000 | 4,030,000 |

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・社会心理学
キーワード：社会心理学，感情表出，コミュニケーション

## １．研究開始当初の背景

対人的要因は，私たちの感情コミュニケーションのメカニズムを支える重要な要因である。その中でも,「他者との関係性」の要因は，対人関係の維持や発展と特に密接な関わりを持つと考えられる。これまでの研究では，感情共有場面を対象として，「他者との関係性」が表情表出に及ぼす影響とその制御過程を検討してきた。その結果, 友人関係においては，パートナーと感情を共有したいという欲求が高まり，笑顔の表出を促進することが明らかとなった（山本・鈴木, 2005）。しかしながら，不快感情の表出は他者の関係性によって影響を受けなかった。これは，不快感情を表出するか否かの判断に,「誰と一緒にいるか」だけでなく,「それがどのような状況であるか」が

関係するためと考えられる（井上，2000）。そこで申請者は，状況要因を整理することが，対人場面における感情コミュニケーション過程のさらなる解明に重要と考えた。

これまでの研究で用いた状況は，二者間の感情共有場面であり，どのような感情を表出すべきか躊躇するといったことは少なかったと考えられる。本研究では，感情表出の葛藤が生じる場面を取り上げる。葛藤場面の検討により，感情コミュニケーション過程の理解や，隣接の研究領域への示唆が得られると考えた。

## ２．研究の目的

本研究の目的は，社会的スキルが要求される感情表出の葛藤場面を設定し，「他者との関係性」が感情コミュニケーション過程に及ぼす影響を検討することであった。感情表出の葛藤場面としては，複数観衆場面を取り上げた。複数観衆場面とは，異なる役割を持った複数の他者が同時に存在し，それぞれの相手に異なる情報を伝達しようとする場面である（Fleming，1994）。本研究により，感情コミュニケーションにおける対人的要因の影響過程を解明するとともに，社会的適応につながる感情コミュニケーション方略の提案を目指すこととした。

## ３．研究の方法

感情コミュニケーション場面に観察者が存在する実験状況により，コミュニケーションパートナーと観察者に対する感情表出の葛藤場面を設定し，表情表出に及ぼす影響を検討した。

### (1) 面識のない観察者の存在が二者間の感情コミュニケーションに及ぼす影響の検討

① 実験参加者　大学生 158 名（平均年齢 18.61±0.83 歳）が実験に参加した。実験条件は，観察者（あり・なし）×実験参加者ペアの関係性（友人・未知・単独）であった。

② 質問紙　一般感情尺度（小川ら，2000）：4 件法，24 項目。肯定的感情（PA），否定的感情（NA），安静状態（CA）の 3 つの下位尺度からなる。

　他者意識および自意識：他者意識尺度（辻，1993）から内的他者意識の 7 項目を，自意識尺度（菅原，1984）から公的自意識と私的自意識の各 6 項目を，状態を問う言い回しに変えて使用した。7 件法。

　会話満足度：木村ら（2005）から抜粋した 6 項目，7 件法。

③ 手続き　実験参加者は上記のいずれかの条件で，快感情喚起映像を視聴し（映像セッション），その後その映像の感想について会話（会話セッション）を行った。観察者あり条件では，参加者とは面識のない学部学生が実験中入室し，メモ書きをしながら，参加者の様子を観察した。感情喚起映像呈示中および会話中の表出行動をビデオ撮影し，実験終了後，2 名のコーダーが，笑顔，パートナーに視線を向ける行動，発話の累積時間を算出した。また，主観的指標として，感情と社会的動機（自意識，他者意識，会話満足度）を質問紙で測定した。

### (2)観察者との関係性が二者間の感情コミュニケーションに及ぼす影響の検討

① 実験参加者　同性の友人同士のペア 29 組 58 名であった。実験条件は，観察者と参加者の関係性（友人観察者・未知観察者・観察者なし）であった。

② 質問紙　研究(1)とほぼ同様であった。

③ 手続き　実験参加者は上記のいずれかの条件で，快感情喚起映像を視聴および会話を行った。未知観察者条件では，参加者とは面識のない学部学生が実験中入室し，メモ書きをしながら，参加者の様子を観察した。友人観察者群では，観察者は参加者と友人関係にある者であった。感情喚起映像呈示中（映像セッション）および会話中（会話セッション）の表出行動をビデオ撮影し，実験終了後，2 名のコーダーが，笑顔，視線，発話の累積時間を算出した。また，主観的指標として，映像呈示後および会話後に感情と社会的動機（自己意識，他者意識，会話満足度）を質問紙で測定した。

## ４．研究成果

### (1) 面識のない観察者の存在が二者間の感情コミュニケーションに及ぼす影響

① 映像セッションにおける表出行動　笑顔の累積時間（図 1）について，関係性および観察者を実験参加者間要因とする分散分析を行った。

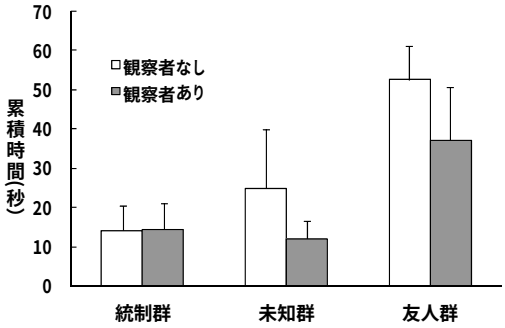


**図1 映像セッションにおける笑顔の累積時間**

その結果，関係性の主効果が有意であっ

た（$F(2, 80)=6.67$, $p<.01$）。多重比較の結果，統制群および未知群に比べて，友人群において笑顔の累積時間が長かった。観察者の主効果および交互作用は有意でなかった。このことから，映像セッションにおいては，観察者効果は認められなかった。

② 会話セッションにおける表出行動　笑顔の累積時間について，関係性および観察者を実験参加者間要因とする 2 要因分散分析を行った。その結果，関係性の主効果が有意であり（$F(1, 48)=17.35$, $p<.01$），未知群の方が友人群よりも笑顔の累積時間が長かった。観察者の主効果，および交互作用は有意ではなかった。

視線の累積時間（図 2）について，同様の分散分析を行ったところ，交互作用が有意であった（$F(1, 48)=6.70$, $p<.01$）。単純主効果の検定を行ったところ，未知群における観察者の単純主効果が有意であり（$F(1, 48)=5.45$, $p<.01$），観察者あり群の方がなし群に比べて視線の累積時間が長かった。

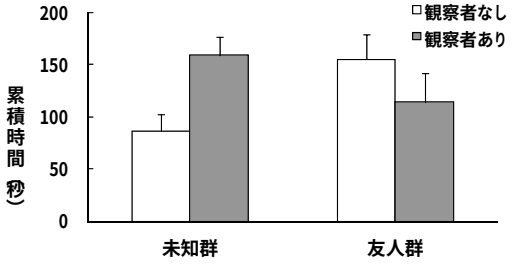


**図2 会話セッションにおける視線の累積時間**

発話の累積時間について，同様の分散分析を行ったところ，関係性の主効果が有意であり（$F(1, 48)=9.62$, $p<.01$），友人群に比べて未知群の方が発話の累積時間が長かった。観察者の主効果，および交互作用は有意でなかった。

会話セッションにおいて，未知群では，観察者あり群の方がなし群に比べてパートナーに視線を向ける行動が多かった。これは，観察者の存在が表出行動を抑制するという先行研究の結果とは異なるものであった。この原因として，観察者がある場合に，未知群の参加者同士が映像視聴や会話といった共同作業を通して，お互いを内集団と見なすようになったことが考えられる。一方，友人群ではいずれの表出行動においても，観察者の有無による差は見いだされなかった。したがって，友人関係では二者間でコミュニケーションが完結し，外部他者の影響を受けないことが考えられる。

また，関係性の効果が認められ，未知群が友人群よりも表出行動が活発であることが見いだされた。これは，映像呈示中の本実験結果や映像呈示パラダイムを用いた先行研究と反対の結果である。これは，映像呈示中は感情表出の側面が強いのに対し，会話中はパートナーに対する自己呈示の側面が強いという場面の違いを反映するものであるかもしれない。

③ 表出行動のペア間の相互依存性　以上の表出行動について，ペア間の相互依存性を調べるため，ペアワイズ級内相関を算出した（表 1）。その結果，笑顔においては，すべての群で有意な（あるいは有意傾向）正の級内相関が認められた。視線においては，観察者あり群において有意な正の級内相関が得られた。発話では，友人群において正の級内相関が認められた。

**表1 ペアワイズ級内相関**

| | | 映像 | 会話 | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 笑顔 | 笑顔 | 視線 | 発話 |
| 未知群 | 観察者なし | .30 | .82 ** | .42 | .32 |
| | 観察者あり | .79 ** | .66 ** | .67 ** | -.32 |
| 友人群 | 観察者なし | .79 ** | .61 * | .14 | .45 † |
| | 観察者あり | .73 * | .62 † | .92 ** | .71 * |

視線においては，観察者のある条件でのみ二者間の視線の表出に一致性があると言える。これらのことから，アイコンタクトを活発に行うことで，観察者に向けて二者関係の親密さを呈示していた可能性が考えられる。

(2) 観察者との関係性が二者間の感情コミュニケーションに及ぼす影響の検討

① 表出行動　映像セッションの笑顔，視線，発話の各累積時間について，群を要因とする分散分析を行った。その結果，発話の累積時間において主効果が認められ，友人観察者群が未知観察者群や観察者なし群に比べて，有意に長い発話時間を示した（$F(2,43)=11.85$, $p<.001$; 図 3）。笑顔の累積時間も同様のパターンを示したが，統計的に有意ではなかった。

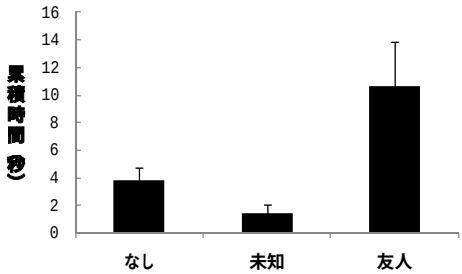


**図3 発話の累積時間**

会話セッションの各指標についても，映像セッションと同様の分析を行った。その結果，発話の累積時間において群の主効果に有意傾向が認められた（$F(2,43)=2.46$，$p<.10$）。その他の指標においては，有意な差は認められなかった。

以上の結果より，発話は友人観察者の存在により促進されるが，笑顔や視線などの非言語行動は観察者の影響を受けなかった。したがって，面識のある外部他者が存在する場合には，非言語行動は影響を受けないが，言語を介した感情伝達が促進されると考えられる。

② 主観的指標　表出行動と主観的指標の関連を検討するため，セッションごとに相関係数を算出した。会話セッション（表2）において，笑顔は PA 得点，会話満足度と正の相関を示した。視線は NA 得点と負の相関関係にあった。発話は会話満足度と正の相関，公的自意識と負の相関を示した。

**表2 会話セッションにおける表出行動と主観的指標の相関**

| | CA | NA | PA | 会話満足 | 公的自己 | 内的他者 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 笑顔 | .23 | -.12 | .46 ** | .33 * | -.09 | .12 |
| 視線 | .10 | -.36 * | .12 | .22 | -.07 | .12 |
| 発話 | .21 | -.17 | .21 | .35 * | -.41 ** | -.19 |

このことから，言語的行動は公的自意識のような社会的側面に関わる心理的変数によって調整されると考えられる。一方，非言語行動は，観察者との関係性による調整は行われず，主観的感情状態を反映したものであると考えられる。

(3) 本研究の位置づけ，今後の展望

本研究は，表情表出の社会的機能に関する研究と位置づけられる。先行研究の多くは，主に感情が共有される場面を対象として，社会的要因が表情表出に及ぼす影響を検討してきた。感情共有場面と比べて，本研究で扱った葛藤場面は，感情表出の制御が求められ，また制御の失敗により後の対人関係の悪化を導く可能性のある状況である。葛藤場面では，複雑な社会的要因が表出行動の制御に影響するものと考えられるが，本研究はその要因を解明する一助となったと言えよう。

研究結果から，観察者の存在が二者間の感情コミュニケーションを促進することが明らかとなった。これは，単独の参加者を対象とした先行研究とは異なる結果であった。したがって，コミュニケーション場面における観察者は，単独の参加者に対する観察者とは異なる意味を持つと言える。表情表出理論を構築する上で，複数の他者の存在を考慮に入れることの重要性が示された。

しかしながら，表出行動の根底にある心理的過程については，未解明の部分が残されている。観察者やコミュニケーションパートナーに対する社会的動機として，他者意識や自意識を測定したが，観察者の有無や関係性による明確な違いを見いだすことができなかった。この点については，測定方法の改良や，異なる実験条件の設定などにより，さらなる検討が望まれる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計３件）

① 山本恭子・藤重育子・本田周二・稲葉小由紀・木村昌紀・栗川直子・山上榮子・小石寛文　大学生の心理的適応に関するスクリーニングテスト作成の試み(1) 項目の選定　日本心理学会第74回大会，2010年9月21日，大阪大学（大阪府）

② 山本恭子　観察者の存在が二者間の感情コミュニケーションに及ぼす影響(2)　日本社会心理学会第50会大会，日本グループダイナミックス学会第56会大会合同大会，2009年10月11日，大阪大学（大阪府）

③ Kyoko Yamamoto & Naoto Suzuki, The effect of observer on dyadic emotional communication, Conference of International Society for Research on Emotion 2009, 2009年8月8日, Leuven (Belgium)

６．研究組織

(1)研究代表者

山本　恭子（YAMAMOTO KYOKO）

神戸学院大学・人文学部・講師

研究者番号：50469079

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし